

(論文内容の要旨)

本論文は、北宋末年から南宋初期に至る政治史の展開を、「御筆手詔」(皇帝直筆を前提として中書・門下を経ずに直接下される文書)の出現を軸にして論じたものである。「序章」・「終章」のほか、四章で構成される。

「序章」では、まず内藤湖南・宮崎市定・梅原郁ら京都学派による中国近世の君主独裁制の性格規定を確認し、「君主独裁制」と「専制君主制」「独裁君主制」との違いに言及する。ついで、政治的主体性をもった専制君主による既存の制度の超克が君主独裁制の次段階を準備したとして、北宋における神宗皇帝の存在の重要性を強調する。そして、神宗以後の政治を大きく転換させたものとして「御筆手詔」を取り上げ、徳永洋介の研究によりつつその制度的演変を紹介したうえで、本論では御筆手詔が発せられた政治的空間、時代的文脈を具体的に検討していくことを告げる。

第一章「崇寧五年正月の政変―蔡京の第一次当国と対遼交渉」は、崇寧五年(1106)の彗星出現を契機として起こった政変の背景を考察するものである。徽宗初年にまでさかのぼって政治情勢をつぶさに検討し、政変は徽宗が一時的な感情にまかせて蔡京を罷免したものであるとする通説に対する見直しを迫る。従来、徽宗初年の「小元祐」と称される時期に「垂簾聴政」を行った向太後の政治は新・旧両法の中道路線を行くものとされてきた。しかし、論者は、向太后が新法党急進派の蔡京を庇護し、「帰政」以後も蔡京とつながって政局に影響力を行使していたことを指摘し、さらに元符三年(1100)の蔡京の左遷は徽宗―太后間の権力闘争の結果であり、「中道路線」とは、垂簾聴政期ではなく、徽宗が政局を主導するようになってからのものとして、政治史の見方を転換する。

親政の当初、政局運営を委ねられた曾布政権はまもなく破綻し、中央に復帰した蔡京が崇寧年間の政局を壟断する。この時期に登場してくるのが「御筆手詔」である。従来、御筆手詔は皇帝の権威を利用した蔡京の政治手段とみなされてきたが、

論者は「御筆」を行使する皇帝の政治的主体性を強調し、具体的には徽宗と蔡京の間に政治路線の対立があったことを、対遼政策を分析することによって明らかにする。

蔡京の外交姿勢は強硬であり、崇寧四年(1105)徽宗の宥和策を盛り込んだ国書を携えて遼に乗り込んだ使者は蔡京の意を受けて天祚帝の面前で遼を侮蔑する言動を繰り返して、外交を混乱させた。こうした経緯ののちに起こった崇寧五年の政変とは、徽宗が事態の修復を図るとともに蔡京の排除を画策して上からのクーデタを發動したものであるというのが結論である。

第二章「徽宗朝における殿中省」では、まず現在遼寧省博物館に所蔵される伝徽宗筆「蔡行勅」を取り上げ、跋文・所蔵経緯・押印(「御書之宝」)を仔細に調べ上げてその由緒を確認し、一部に存する胥吏執筆説を退け、徽宗の親筆または当時御筆手詔を代筆することもあった女官の手になるものと推測する。

御筆の受領者である蔡行は蔡京の孫で、宣和年間の殿中省の長官であった。殿中省は、これまで天子の日常生活を支えてきた六尚局の機能を統合すべく崇寧二年(1103)に設置されたものの北宋の滅亡とともに消えた、まさしく徽宗時代の産物である。論者は官署の構想・設置・移転を跡付け、従来の六尚局との関係を探り、新官庁設立の意味はひとえに殿中省の長・次官に就いた文官士大夫による宦官統制にあったとする。

さらに殿中省の人事面の分析によって、蔡行のみならずほとんどの長・次官が蔡京の一党であることが判明する。つまり、蔡京は殿中省を通じて、徽宗との意思疎通の強化を図り、御筆を行使して政治的主体性を発揮する徽宗と内廷を外から箝制しようとしたのである。

第三章「北宋末の宣和殿—皇帝徽宗と学士蔡攸」は、前章に続いて宮城内の政治空間を取り上げたものである。諸史料に見える錯綜した記述を整理して、「宣和殿」「保和殿」「保和新殿」の位置を確定した後、諸施設の複合体としての宣和殿が果たした文化的・政治的機能を論じる。従来、文化的機能のみが目だっていたが、宣和殿の後廊で睿思殿文字外庫使臣が宦官梁師成のもとで御筆の作成にあたっていた

ことに注目すると、政治的側面が浮上してくる。

その宣和殿に置かれた学士に最初に就任したのが蔡京の子蔡攸であった。論者は以後宣和殿学士に就任した者を悉皆洗い出す。その中でもやはり蔡攸の存在が極めて大きく、これまで父の影に隠れがちであった蔡攸と徽宗の関係が極めて密接であり、むしろそれが父と徽宗の関係に大きな影響を与えていたことを指摘する。つまり、蔡京は宣和殿の蔡攸、殿中省の蔡行を通じて内廷の御筆政治を統制しようとしたのであり、この二重の装置あったればこそ、再三の失脚から宰相の座に返り咲く粘り腰を発揮できたのである。

第四章「武臣の清要」－南宋孝宗朝の政治状況と閤門舎人」は、南宋第二代皇帝の孝宗による武臣登用策について論じる。中興の英主とされる孝宗の時代はこれまで先代の高宗時代に比べて研究が手薄であったが、最近その側近政治がようやく正面から取り上げられるようになった。しかし、乾道六年(1170)に始まる一連の武臣重用策の目玉とも言うべき閤門舎人については、依然としてしかるべき注意が払われていなかった。論者は、孝宗が前代と異なって積極的に御筆政治を展開し、輪対(官員が皇帝と一対一で対面し上奏を行う)の復活によって、宰執の関与から独立した領域を確保したと述べ、さらに、御筆伝達の職務を担った閤門舎人が筆記試験による登用という手続きを踏むことで「武臣の清要」として士大夫に認知されたこと、供職後も知州任官の優遇を与えられ、その中から中央に復帰して側近政治を支える者が出現したことを指摘し、孝宗の武臣重用策の全貌を明らかにした。また、かかる孝宗の政治手法には先代に仕えた専権宰相秦檜と相通ずるものがあったと付言する。

「終章」は、本論の所説をあらためて整理しなおし、「専制君主」と呼ぶべき神宗によって端緒がつけられた御筆政治が徽宗・孝宗の時代に定着し、君主独裁制は新たな段階に入ったと位置づける。最後に、本論で取り上げられなかった神宗期の詔勅作成の問題、蔡京の第二次当国期以降の御筆政治の展開、さらには御筆が不活発であった高宗－秦檜政権の性格について今後考究していくことを予告してしめくくる。

氏 名	ふじ 藤 もと 本 たけし 猛
-----	-----------------------

(論文審査の結果の要旨)

内藤湖南や宮崎市定が「君主独裁制」成立の画期とみなした宋代は、以後日本の中国史研究の一焦点となり、研究蓄積も厚い。しかし、研究の重心は北宋にあって、南宋の研究は質量ともに貧弱といわざるを得ない。南宋時代の研究はむしろアメリカで1980年代に活況を呈した。その地域エリート論を基軸として南宋の社会を把握しようとする試みは日本にも輸入されて、現在の南宋史研究の一つの枠組みを作っている。

しかし、この枠組みは明清時代の郷紳論との接続を多分に意識したものであって、北宋史との連関が明らかでない。またこの枠組みの基底にある、北宋から南宋への変革を強調するいわゆる「両宋変革論」も、そのじつ中央から地方に視点をずらしただけであって、いまのところ唐宋変革のような大きな構造転換を可視化するまでには議論が成熟していない。

そもそも、北宋と南宋の連続あるいは断裂を正面から取り上げた研究は存在せず、北宋と南宋の研究の間には大きな溝が走っていて、研究者の棲み分け状況が厳然としてある。従来の研究が北宋全盛期とされる仁宗朝から神宗朝の王安石の改革期、つまり士大夫の規範と後世仰がれるような文人政治家が輩出した時期に集中していたのに対し、近年ようやく北宋末の徽宗朝や南宋前・中期をとりあげた研究が若手の間から出てくるようになったが、今のところ前後の接続を強く意識したものであるようには見えない。また、中国では昨年から「南宋史研究叢書」という大型企画(全53冊刊行の予定)が始まったところだが、裏を返せば今までそれだけ南宋史が軽視されていたということである。

本論文は第一章～第三章までは徽宗朝、第四章は南宋の孝宗朝の皇帝権力のあり方を「御筆手詔」を手がかりにして検討したものであり、間に挟まる高宗時代に直接の言及はないものの、北宋末と南宋初の間に架橋しようとする数少ない研究である。その特色と成果を大きくまとめると二点になる。

〔1〕政治空間への凝視

政策が立案され、皇帝による決裁を経て施行に移されるまでのプロセスは文書行政の制度史として詳細に研究されてきており、御筆手詔を扱った本論についていえば、先行するものとして徳永洋介の研究(1998)が存在する。しかし、これらのプロセスが進行する場、宮廷政治が繰り広げられる空間が可視化されるまでには至っていない。そうした側面に早くから注目してきた唐代史研究に比べて宋代の研究は遅れており、ようやく近年になって政治空間の分析の必要が唱えられるようになり、それを意識した研究も出始めている。

第二章、第三章、第四章はそれぞれこうした提唱への具体的解答である。徽宗朝に設置された殿中省については史料の記述が錯綜しており、その場所が明確でなかった。論者はこれを整理して、神宗期における禁中での設置構想→皇城内での設置→皇城外への移転という経緯を明らかにした。そして、こうした場所の移動に、官庁の設置を仕掛けた蔡京と皇帝の日常生活を管理する六尚局に拠る宦官の力関係の反映を見るのである(第二章)。

また、宣和殿は「書譜」「画譜」「博古図」に代表される風流天子の芸術空間として際立っているが、じつは御筆が発せられる政治空間としても大きな意味を持っていたとして、ここにも御筆作成に関与する宦官と、学士として宣和殿に侍る蔡氏一党の拮抗を見る(第三章)。あるいは、孝宗朝に復活した「輪対」を取り上げ、皇帝と臣僚が一对一で向かい合い、宰相・執政の関与を排したインティメイトな空間を問題にする(第四章)。これらの分析はいずれも、御筆によって政治的主体性を発揮しようとする皇帝が現出させた政治空間と宰相を筆頭とする外朝との緊張関係を浮き彫りにしており、他の時代の研究にも有益なケース・スタディを提供するものとなっている。

〔2〕「士大夫の時代」の見直し

本論文の主役の一人蔡京は『宋史』において「姦臣伝」に列せられているが、その前にある「佞幸伝」には第四章で取り上げられる孝宗の側近政治を支えた曾覿・龍大淵が含まれ、さらにその前には蔡京とともに亡国の責めを負わされた童貫、宣

和殿での御筆作成に大きな影響力を行使していた梁師成らの「宦者伝」が位置する。皇帝権力のありかたを考える時、これらの「姦佞」や宦官の存在はきわめて重要だが、正史のナラティブにおいてこのようにカテゴライズされ、またしばしば「暗君を操縦し、同惡相い濟けるもの」と一括りにされることによって、その政治的個性が隠蔽され、皇帝との関係・距離が正しく測定されない。とくに、「士大夫の時代」とされる宋代にはその傾向が強く、それは今日の研究にも影を落としている。たとえば、蔡京は童貫ら宦官と結びつくことによって禁中に影響力を行使したというのが通説的理解であった。

これに対して、論者は上述したように政治空間を凝視することによって内廷と蔡氏一党の拮抗関係をあぶりだす一方で、政治史を丁寧にトレースしなおす作業を通して、崇寧五年の政変（第一章）、宣和殿で演じられた譲位劇（第三章）に徽宗の政治的主体性を認め、彼が蔡京や童貫の単なる操り人形ではなかったことを明らかにした。また、徽宗と対照的に明君とされる孝宗が文人士大夫への不信感から武臣を重用したことは有名であり、宋代の官僚機構における武臣の制度的位置についてはつとに梅原郁の研究（1984）が明らかにしているが、論者は政治史のダイナミズムの中で改めて武臣の重要性を確認し、閤門舎人の新設によって科挙出身の士大夫と異なる武臣のエリート創出を企図した孝宗の政治手法を鮮やかに描出した（第四章）。

ただ、惜しむらくは、論者が徽宗・孝宗の政治的主体性を抽出することに成功しながら、それを「本来の君主独裁制」からの逸脱と位置づけてしまっていることである。つまり、宮崎の「君主独裁制」を理念型としてそこからの距離を測るに止まっている。君主独裁の概念そのものを鍛え直す必要があるだろう。また、今のところ高宗—秦檜期の分析を欠くため、北宋末から南宋初への架橋は未完成である。今後とも工程の進行を見守ってゆきたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年2月16日に調査委員3名が論文内容とそれに関わる事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。